

「審判員の業務と心得」

《審判員＝マーシャルとは何か》

記録の立証者である、審判員は、“選手の成果”を証明する。「正しい記録順位である」と明言できる。例え、第三者から異議がでようとも、自信を持って説得”できる。これが何よりも重要なことである。

競技の背景を知り、選手の立場を考え、審判員から一方的でない分析があつてこそ、自信をもって証明することができる。

しかし、審判といえども人間の判断能力には限界がある。これを補足するために記録を立証できる適切な体制をつくることになる。トレイルランニングは、最良の運営があつて、審判体制が整うものである、審判員が対象とするのは、完全に再現することができない“競技者の連続した動きであり、その動きは競技環境により著しく異なる。

「審判をしやすい環境とは、選手が競技しやすい環境」といえる。しかし、理想を求めすぎるあまり、現実を見落とすことがある。一方で、現実に関心するあまり、理想を忘れがちにもなる。

《理想と現実》を直視して、最良の環境をめざす。審判員だけで達成できるものではない。それゆえに、見る立場により価値の違う、多面的な情報に耳を傾けながら、競技記録を立証していくことを指すものである。

《ルールをいかに解釈し運用するか》

審判員の裁量によって微妙な差が生まれがちです。そして、この差が時としてやっかいな問題を引き起こします。

複雑な状況のなかで起こるルールと競技者の係わりを適切に捉え、実際の運用でも適切な判断が行えるようにならなければいけません。

権威主義は21世紀のスポーツに不適と考えます。

このようにスポーツを愛する選手の気持ちに、真摯な態度で対応できるようにする。これにより、トレイルランニングの広い理解と普及そして質的向上につながるものと考えます。

審判業務のなかで、現実と理想の狭間に思い悩むかもしれません。実践のなかで起こる数々の矛盾に興味を持ち、人間と自然そしてスポーツが織りなすトレイルランニングの技術論そしてこれを取り巻く社会論に身を染めてほしいところです。《競技者の権利とは何か》

選手と審判。主役は選手、審判員は、選手に指示や注意を与え、警告や失格を宣告する。ときには、教育的指導が必要なこともある。この図式から、選手はあたかも管理の“下”に置かれているように見える。

しかし、どのようなときも《主役は選手》である。審判員は、選手を下から支える“支える側の主役”といえる。

選手は、審判員から一方的に指示を受けるばかりではない。ルールから理解できるように、大会の改善要求を行い、意義を申し立て、上訴できる。

このように、ルールからも《選手の義務と権利》は一体となっている。正当な方法で権利を駆使するよう、審判員は、これを奨励し、選手の意見を集める努力をする。これにより、選手と審判員・主催者の“適度な緊張感”が生まれ、大会の質的向上の意識が芽生えてくる。

審判員の心得は、「選手が意見を言いやすい雰囲気をつくる」ということである。耳の痛い話しにも、真摯な態度でこれを受け、誠心誠意これに答を出す。

この温かな関係により、大会そして競技団体という組織のなかで、問題を解決する自浄能

力を高める。スポーツをとおした《友好的な人間関係》をつくりあげていきたい。

＜審判員の基本の動きは＞

見届けること。未然に防ぐこと審判員の対応には、「違反を確実に見届けてから判断すること」と、「違反を起こしそうな選手に、注意を与える」という二つの方法がある。競技の現場では、両方を使い分けているといえる。もちろん双方の向上への努力は必須のものである。

＜表現の方法がすべて＞

挨拶と和らぎが選手に対する、審判員の言葉あるいは文章での表現一つで感情が変わり、そして理解度が大幅に違ってくる。「主催者が作る案内がいかに分かりやすいか、審判員の話し方に思いやりがあり適切であるか」など、多方面に気配りをしたい。

心のなかでは敬意を表していたとしても、それが言葉となって出なければ、相手に伝わらない。主催者そして選手に対しても同様である。「挨拶で始まり、挨拶で終わる」当たり前のことを、審判員みずからが励行したい、

さらに、いかに正しいことを主張していても、その表現が、あまりに一方的で厳しすぎれば、相手は心を開いてはくれないだろう。

大会という緊張度の高い場面では、ことさら「相手に伝える表現力」を高めていかなければならない。一言のやわらいだ言葉が、怒りや興奮を吸収してくれることがある。大会開催は、経費面、交通事情、運営面からもますます厳しい現状に直面している。審判員は、大会主催者を勇気付け、実際に力となる気遣いが必要である。

「何々をすると失格です」という表現を「こうしてください」と口頭でも文書でも言い換える。これにより、受け取る側の気持ちは変わる。失格という言葉は断定的に使うこともときに必要だが、できるだけ言い換えてみたい。

＜選手と審判が一体となるために＞

選手の真剣さに追いつく、従来からトレイルランニングは、過酷な条件のなかで挑戦する者というイメージが先行してきた。この精神は大切である。

競技の進展のなかで、選手と審判員の真剣さにレベル差はないか。選手たちの真剣さは、それぞれの動機があり、同一ではないだろう。国際大会目指すもの、日常から脱皮しエンジョイする者、体力向上を目指すもの、まちまちである。

審判員は、これらの選手たちの“真剣さに呼応し、この気分を盛り上げてやろうという新たな時代のマーシャル感覚を持ちたい。

競技を行う選手たちが、毎日のように練習し目標をめざしている。その一方で、審判員は、毎日のように研鑽を積んでいるだろうか。

日頃から、選手の行動パターンそしてその心理面からの動機を知る努力が求められる。「なぜルール違反が起こるのか。なぜマナーが守られないのか」、これを「なぜ交通ルールが守られないのか。なぜ電車のなかでマナーが守れないか」というように比較し、心理を分析してみることが的確なアプローチとなる。

大会でマナーが守れないのは、指導する側のマナーを振り返ることも大切な訓練となる。

何より大切なのは、審判員の誠実な態度である。指導がハッキリと明るく相手に伝わってこそ選手たちに注意して指導する“資格”が一般社会での通念として全うされる。

トレイルランニングの大会は、一般競技と同様に、社会的なかわりのなかで行われるものである。

そのため、一般社会生活と同様なルールが適用される。「競技ルールの前に社会ルールがある」。社会人として良識ある言動を心掛けることを強調するのはこのためである。

交通規制を受けた競技中においても、道路交通法による適用を受けていることは、意外なほど認識されていない。

「交通規制」が、トレイルランニングのための「聖域」をつくっていると誤って捉えられることがある。大会は、交通規則を順守しながら、所轄警察に認められた特別なルールの恩恵を受けて開催されていることをぜひ認識したい。

さらに考えなければいけないのは、民事はもとより刑事においても、いくつもの規制を受けながら、大会が開催されているということだ。

レースを終えた選手が、観客の多数いるフィニッシュわきで声援を送っている。

深夜や早朝の状況で、審判員が「静かにしてください」と注意を与えた。

そのなかの一人が、「そのようなことはルールに書いてない」という意味のことで反論してきた。確かにルールにはない。しかし、深夜や早朝に住宅街で大声を上げることに違和感を感じる人は多いだろう。これを意識できることが社会ルールである。

もし、そのようなことまでルールに明記しなければいけないなら、規則集は電話帳の厚さになってしまう。

選手にとって根底にある考え方は、「危険を承知して参加した選手は、自己の責任と管理のもとに参加する義務がある」とするもので、誓約書にもそのことが冒頭に明記されている。

さらに論を発展させれば、「選手とは、競技面からいえば、トレイルランニングの危険度・不安要因を了解し、競技を行える気力と体力そして技術を有する者」となるのである。

これらを守る為にトレイルランニングの競技団体は、安全走行の講習会や安全走行の為に情報を送り、選手を保護し、権利を守ろうとする。トレイルランニングを支えるメンバーとしての社会的な認知を得られるということにもつながっている。

トレイルランナーの社会的な立場を確保し、組織的にこの発展を促すことが、起こりえる問題や事故に対応する積極的な方策である。

大会関係者は、良い天気にも恵まれてほしい、事故なく終了したいなど、大会の成功という一大目標のために、「そうあってほしい」ということばかりを想定しがちである。

当然のことだが、一方で審判関係者は、「起こりえる最悪の事態」を想定して大会に臨まなければいけない。これにより、緊急時の対処方法が、机上の論理でない、現実感を伴ったものとして身に付いてくる。

大会は、「所轄機関、住民、ボランティアスタッフ、スポンサー、報道メディア」の五本の大きな柱によって開催される。

所轄警察は、地域住民の開催地への賛同を前提に許可を検討する。そのため、例え開催許可が出ても、地域の人たちが迷惑と感じたり興味をなくせば、大会は続かないと思います。大会は「地域を中心とした理解と協力」を第一に考えるものである。普段使っている山道や道路を選手のために開放してくれているのを再認識しなくてはなりません。

そのため、トレイルランニング開催の意義を広く伝えるために、地道な審判員の協力と助言が大会成功の為に必要となるのであります。

文責 一般財団法人日本トレイルランニング協会 理事長 宮地由文